



旧音別町の地域課題と音別ふき露団

(一社) 釧路社会的企業創造協議会

櫛部 武俊

生活困窮者個別支援⇒連携(つなぐプロ・行政)⇒ 住民生活(ナチュラル資源)にたどりつく

- ◆人口減 2005年平成の大合併
人口2,756人⇒2019年1,909人に減少
- ◆中心から周辺になる。議員ゼロ
- ◆基幹産業・酪農・林業など
2つになる特産自生蕎麦が枯渇
- ◆営農を辞める酪農家
生活困窮と孤立
- ◆蕎麦への思い・音別住民の自尊心
つなぐプロ発見と住民生活の普遍性
(困窮支援・雇用・総合事業通所サービス
・観光・農福連携・地方創生・介護)
- ◆互酬(ストロング)+よそ者(ウイーク) ⇒共感の醸成に一役





男性 ~2015 ● / 2015~2017 ● / 2017 ● / 2017 ● / 2017 ●
 女性 ~2015 ● / 2015~2017 ● / 2017 ● / 2017 ● / 2017 ●

1 落をたべる頻度、時期を教えてください

3日に1回	
週に1回	
月に1回	
3か月に1回	
半年に1回	
年に1回	



参考みはら・かがやき食堂

月1回3時間営業 釧路の「かがやき」

地域食堂ですが

人気は名店級

【釧路】釧路市内の地区会館で毎月1回、3時間だけ営業する地域食堂が、毎回100食以上の定食が売り切れるほどの人気となっている。全国の特産品を使った定食が中学生以上300円、小学生以下100円で味わえるほか、同時に開かれる一輪車教室や大学生らによる学習応援コーナーが好評。幼児からお年寄りまでが楽しむ交流の場に育っている。

(釧路報道部 佐竹直子)

毎月第2土曜の午前11時に迎えられ、うれしい「アかがやき」にある会議室が、60席の「みはら・かがやき食堂」に変わる。ランチを囲んで住民が交流する場をつくり出すと、昨年5月に始まった。今月8日は、ボランティアの中高生12人が接客を担当し、「いらっしやいませ」の元気な声で客を迎え入れた。開店からまもなく、席はお年寄りや子どもたちで埋まった。

定食は、根室産アサリを使ったパスタとクラムチャウダーに、果物のデザートがついた。笑顔で食べていた独り暮らしの野村敬子さん(78)は「孫みたいなたた

毎回100食以上完売 ■ 高齢者も子供も



高齢者や親子連れでにぎわう「みはら・かがやき食堂」。高校生(中央)がサービスのコーヒーを笑顔で配る

地域食堂 安価な食事を提供しながら住民の居場所や交流の場所をつくる非営利の住民活動「コミュニティ・レストラン」とも呼ばれる。食堂によっては子育て支援や、障がい者、若者の就労体験の場などとしても活用されている。

の支援で運営費を賄う。道内の地域食堂は、コミュニティ・レストランネットワーク北海道(後志管内余市町)が把握するだけで約30カ所ある。同団体は「20〜50食を出す食堂が多い中、200食近く提供するかがやき食堂はすごい」とを築く場になりたいと願う。

100円玉を手に、1人で食堂に来る子どもも少なくないという。松田さんは「世代を超えて一緒に楽しく食べて支え合う。そんな関係が指導する子どもたちのための学習コーナーも開かれ、毎回十数人が参加している。